

出会い (13)

修道生活 きのお きょう

奥村 一郎



カトリックの古い修道院の生活規則は、日本の禅寺生活とよく似ている。とくに、「祈れ、そして働け(Ora et Opera)」というモットーに生きるカトリックの観想修道院の生活は、禅寺での「座禅と作務(さむ)」に並行する。勿論、カトリックと禅仏教とは、発祥の由来も、その歴史も違うなかで育ってきたことからして、その霊性と文化には、それこそ、天と地、昼と夜、表と裏ほどに相違がある。前にもあげたカルチャーショックのいくつかの小話もその事例。ところで現代では、東西文化交流とか、諸宗教対話とか、文化にも宗教にも国境がなくなりはじめている。多元化社会とかグローバリゼーション(総体化)があらゆる社会領域に広まってきている。宗教も例外ではない。科学文明が精神文化を上回り、覆いつくしてしまうほどの現代において、本来、絶対超越の世界を機軸とする宗教は、どのようにして人類の救いとなるのだろうか。著名な京都学派の哲学者、故西谷啓治は、現代をさして「宗教抹殺の時代」といった。今ここで、こんな途方もなく大きい問題をとりあげるつもりはないのだが、「修道生活きのうきょう」を考えると、気にかかることがいくつかでくる。ただ単に「むかしなつかし」の旧世代の愚痴ではなく、「よいものはいつもよい。いつどこでも」ということを確かめたいと思うだけである。前号につづいて、また、例のフランスでの修道生活初期の一コマをとりあげてみよう。

修道院食事のあれやこれ

何しろ、昭和26年、1951年のこと、今から五十年前、外国渡航者は極めて少ない頃、カルメル会というカトリックの修道院に入るため渡仏することになったことは、本誌で既に書かせてもらった。遠藤周作さんが、その一年前、同じフランスの豪華船マルセイエーズ号で渡仏されていた。フランスといえば、西欧文化の栄光を誇っていた国だけに、わたしのような、今もさしてかわらぬ粗野なものであれば、どこか、緊張していたと思う。折々、フォーク、スプーンの使い方やスープ皿を持ち上げないで、音をたてずに食べる、とかぐらいは、ちょっとばかり特訓してもらったりした。幸い、わたしの行く処はパリーのような大都会の上流家庭ではなく、南仏の片田舎の修道院。当時は世界大戦後の立上がりも、なお難し

奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

い状況のフランスということもあったかも知れないが、「清貧の誓願」をたてる修道生活であることから、日々の食事は、貧しいという以上に厳しかった。朝食は一切れのパンだけ。チーズもバターもジャムもなし。果物などはもってのほか。一杯のお椀にミルクとコーヒー。それだけ。黙っていたただから10分もかからない。食事らしい食事といえは、次の昼食だけが一日のメイン。というのは、日本と違って、主な食事は夕食ではなく昼食であることは、今も変わらないフランスの風習である筈。まず、スープ、次に野菜類、続いて魚類。最後に果物。以上が昼食コース。カルメル会の食事規定では、病気その他、特別の場合以外、生涯、肉食を禁じられていた。仏教の精進料理に近いが、魚類と卵は許されていた。鯨も魚類にいれられていたのは面白い。夕食はまた、極めて簡素。一皿だけの芋類が豆類。つぎにデザート、それで終わり。どれも量は好きなだけとることができたので、お腹がすくということにはなかった。その頃の日本ではもっと貧しい生活であったのと、それに若かったせいもあったのか、粗末な食事でもそれほど苦にならなかった。

ところで、修道院に入ってごく初めの頃のこと、ちょっとした、ハブニングがあった。どの食事でも、朝昼晩、それぞれの食事作法がきめられている。まず院長から順番に食堂の入り口で手を洗ってから食堂に入る。全員食堂に入ると、結構長い「食前の祈り」をラテン語で唱えてから食卓につく。すると二人の食事当番がでて、台所からつぎつぎと食事を運ぶ。ところで、ある日の昼食のとき、食事当番が、主なメニューの魚をもったまま、わたしの前を通り過ぎてしまった。「アリヤ!？」という瞬間、もう遅かった。食堂は沈黙厳守。呼ぶこともできない。なんだが急に腹が空いた気分。

どうしょう？と思っても、名案もでてこない。ふと頭に浮かんだ苦肉の迷案。「食事当番の彼は、自分のなすべきことをしなかった。故意ではないから罪にはならないが、過ちではある。とすれば、ちょっとばかり、彼は煉獄の滞在が長引くかもしれない。その罰から彼を救うためには、この過ちに気づかせねばならない」という自分勝手なインスタント神学が出てきた。そこで、少し離れて立っていた彼に向かって、軽く手をあげて合図をすると、それに気づいた彼はすぐ美味しそうな大きい魚をもってきてくれた。万歳！神に感謝！ともかく小さな鬼の首をとったかのようにわたしはご満悦だった。

ところがその後がまずいことになってしまった。食事が終わって皆で中庭にでると、オランダ人のギョーム修練長がわたしに尋ねた。「お前は今、食堂で何をしたか？」そっとやったつもりなのに、残念、見つかってしまったかと後悔。とにかくそのまま告白した。すると「お前は、修道院の食事規定に相反することをした」と、とがめられた。「カルメル会の会則では、自分の食事については何も要求してはならない。しかし隣りの兄弟の食べものには心を配らねばならない、と書いてある」。そこでわたしは反論した。「わたしの隣りが夢中で食べていて、こちらのことなど気づきもしないなら、どうしたらよいですか？」修練長は「そういう奴は、拳骨で脇腹をグッと押してやればいい」とポーズをしてみせてくれた。ワッと皆で大笑い。「よーし、それならいける！」と納得した。

それからだいぶ後で知ったことだが、このような食事規定は、カルメル会だけではなく、どここの修道院も同じだときいた。ある修道院でこれと似た話をきいた。だが、そこでの話の筋は正反対。ある修道者のスープ皿のなかに、一匹の死んだ蠅が入っていた。さてどうしょう？自分のことは何も要求してはならない。さりとて、そのまま蠅を飲みこむ勇氣はない。そこで食事当番がきたとき、小声で「ボクの隣のスープには蠅が入っていないけど？」というと、すぐに皿をとりかえてくれたという。さすがにベテラン！見事な機転。規則を裏返しに使う背負い投げ！新米のわたしの場合は、なけなしの神学知識をひねり出しての悪戦苦闘。負けたような勝

ったような？養成責任者のギョーム神父の少々乱暴なボクシング方式は彼のオリジナル。今も懐かしく思い出す。

あの時から、もう五十年近くになる。このような話は遠い昔話になってしまった。今の修道院の食事は、ほとんど例外なく、セルフ・サービスになってしまった。それぞれが自分の好きなだけとって食べる。食事当番などはいない。自分のことを考えるだけでよい。何か淋しい、と思うのはわたしだけだろうか？微にいり細にわたる神堂の作法までとはいわないが、何か大切なもの、隣人愛とか相互愛にかかわるものが見えなくなっているのではなからうか？それに厄介なと思える規則のおかげで、楽しい笑いのひと時がでてきたとも言える。ユーモアは人間の豊かさをつくる神の愛の栄養剤である。現代社会の貧血病はまさしくそこに原因があるのではなからうか。家庭にも、学校にも、宗教界のうちに。

写真展のご案内

P.G.I. Shibaura (芝浦)

- ・ 3月3日(金)~4月15日(土)
北山由紀雄 作品展 「流転」
Yukio Kitayama "Realize"
- ・ 4月20日(木)~5月26日(金)
イモージン・カンニングハム 作品展
Imogen Cunningham Photographs
- ・ 6月1日(木)~7月15日(土)
望月正夫 作品展 「木霊」
Masao Mochizuki Recent Works



© Imogen Cunningham

□ P.G.I. 芝浦

東京都港区芝浦 4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143
月・土 11:00-18:00 (日曜日・祝日・第2、4土曜日 休館)
JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分



メッセージ

みずは生命力のみなもと
いのちの水の羊水から生まれ
死水をとって終わるいのち
天からの雨は聖なる神のみず
生き物たちをうるおし
生なる大地にしみ込む
水はいのちを大地に大循環させ
地球上の万の生き物たちを
みずを共有し共に生きる

* 表紙はクリスマス・スティール * パーキンズの写真4枚を十文字に組み合せ、
天の神様と通信するアンテナをイメージしてレイアウトしたものです。